

日本的に発展させた「画聖・雪舟」は、当時蓮実重康が《天橋立図》に関して唱えた「国粹的」新解釈に負っていたはずだ。

小林秀雄にとっての仏文学、伊藤整や阿部知二にとっての英米文学は、もはや幻想の対象というよりも、学者／評論家として必須の参照枠となった。「制度化された西欧」であり、その最新流行を日本に紹介することが、かれらの社会的な任務だったといつてよからう。そこに西欧幻想が制度としての教養に化して命脈を保つ軌跡を見据える必要もあろう。

伊藤整にも増して安岡章太郎や江藤淳の北米体験などは、国内文壇と国際文壇との二重規格の落差に苛まれたケースだろう。このあたりで、国際認知の手段としての日本回帰という現象が表面化する準備も完了する。川端康成のノーベル賞受賞記念講演は、国際市場の消費者からの要請に応えて、演技としての日本幻想を演じたものだろうし、三島由紀夫の晩年の茶番なども、死後の国際的名声を計算のうえで選ばれた、戦略としての「幻想の日本」像の創設だったろう。海外での評判がやがて日本での再評価に至ることまで、三島は予測済みだったかもしれない。

遠藤周作の晩年は、本人も意識していたままの「母なるもの」への回帰を描いたが、かれの周辺に茶席のミサを實行する元「神学生」井上洋治神父とか、新宿でバー経営の「おばかさん」ネラン神父といった、日本同化型missionary群像があるのも、偶然ではあるまい。つづく大江健三郎や大庭みな子から村上春樹や津島佑子の世代で、西洋幻想と日本回帰という問題構成は、ほぼ時代的使命を終える。「日本の民主主義者の具現」を演じる大江の外交官としての使命は、芭蕉の俳諧仲間へのご挨拶が、文学のサイヴァー・スペースにおいて地球大に拡大した現象だし、村上は『やがて悲しき外国語』などと弱音は吐きながらも、グローバル・ヴェレッジにおけるグローブ・トロッターを、筆とマラソンで演じ続けている。はたしてかれらの国際的な活躍は、巡礼で言う「日常への回帰」への回収臨界point of no return を越えてしまったのか否か。地球市民としての特権を生きる現代の作家の代償が、回帰なき巡礼の旅なのか。

連載④ 近代日本文学と西欧

ニュー・ヨーク通信②：制度としての西洋への任務派遣と要請された演技としての日本回帰

日本近代文学なるものを、制度としての西欧との関数から読み直す。そんな思いつきが、二日間にわたるコペンハーゲンでの学会、「幻想としての西洋への巡礼から郷愁の日本への回帰」(九月五-六日)を聞いて頭を擡げてきた。以下は備忘録としての、その粗雑このうえないアウトライン。

通常、日本近代文学の担い手たちは、西欧への巡礼を経験し、それが創作の核をなしているとされる。ただし夏目漱石にせよ森鷗外にせよ、それは精神的には巡礼であったにせよ、制度としてみれば、むしろ任務による派遣missionだった。加えて鷗外はあくまで医学生としての、漱石は英文学の研練を目的としての洋行である。この段階では、文学者となることは、本来の派遣理由からの逸脱ないしは余白ではない。法学の勉強のために洋行しながら、パリで画家としての進路に目覚めた黒田清輝も同じ世代に属する。

文学修行や芸術体験が自己目的となった「巡礼」というと、永井荷風や高村光太郎の世代を待つ必要がある。だがこれらは家庭の事情で少なくとも金銭的には比較的恵まれた洋行を若くして果たし得た特権的な個人だろう。西洋幻想がもつとも強かったのは白樺の文人たちだろうが、その熱狂を冷徹に見据えた木下杢太郎などは二十年代にようやく外遊の機会を得る。小鷗外を自他共に許した医学者がつ文人だが、三六歳での洋行は、彼の文業に抜本的な影響を与えるには、既に遅すぎた。杢太郎自身、その悔恨を綴っている。二十年代のパリ体験の一種無国籍といつてよい通底性と、それが三十年代に崩壊を遂げる様は、今橋映子の近著『パリ・貧困と街路の詩学』(都市出版)があざやかに浮き彫りにしてみせたところだ。

三十年代に入ると、日本の文壇の代表として国際的な「文の共和国」への顔見せという公式任務missionが前面に姿を現す。横光利一の日本回帰は、国際的認知を求めた晴れ舞台パリでの挫折なり疎外なりを心理的の一要因としてはいまいか。島崎藤村の日本回帰はといえば、国際ペン・クラブ出席の帰路、サン・パウロで日本人移民たちを対象に行った講演の政治性は無視できまい。東洋を代表するとともに、中国山水画を

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美
shigezumi